



駿府と今川氏

第21回

地場産業の発展と駿府の職人

職種ごとだった「大工」

いま、大工と言えば、家を建てる時のあの大工さんを思い浮かべるのが普通である。しかし、歴史的に見ると、建築技術者としての大工は番匠大工というものからきており、本来は番匠たちを束ねる最高技術者の意味であった。

したがって、大工は何も番匠に限ったわけではなく、鋳物師大工・塗師大工といったように様々な職種ごとに「大工」がいたのである。

では、今川氏の時代、駿府にはどのような職人がいたのだろうか。今川氏関係の文書から拾える職種としては、番匠・鋳物師・塗師のほかには、鍛冶師・大鋸引・轆轤師・山造・紺掻・酒作・豊刺・皮作・紙漉などの存在が知られている。

大鋸引の大鋸は字の通り大きな鋸で、これを二人で引くわけであるが、この大鋸の出現によって丸太から材木を作ることが容易になった。それまでは丸太をくさびなどで割って板にしていたわけであり、飛躍的な進歩だったわけである。

戦国の産業が地場産業のルーツに

現在の静岡市の地場産業の中には、この今川氏の時代にそのルーツがあるというものもいくつもある。例えば、木工業・漆器業・サンダル製造業などはそれである。

駿府は、立地からしても木材の得やすいところだった。安倍川上流で木を伐り出し、それを筏に組んで流し、駿府近くで加工することができるところである。大鋸引・轆轤師・山造がこれに関連する。

駿府の漆器業は、普通には寛永十一年（一六三四）に始まる浅間神社の造営にあたり、三代將軍徳川家光が、江戸をはじめ各地から漆塗りの名工を集めたことに由来すると説明されている。

確かに、その時かなりの数の職人が集められてはいるが、実はそれ以前、今川氏の時代に漆器業は駿府の産業として始まっ



▲浅間神社造営に生かされた今川氏伝統産業 撮影：水野 茂

ていたのである。今川氏の時代、「中河大工」として文書に出てくる塗師の大工がおり、中川椀と呼ばれる漆塗りの椀を作っていたことが知られている。

サンダル製造業のルーツも、今川氏の時代の皮作が基になっている。戦国時代は鎧や武器などに皮を使うことが多く、ある意味では軍需産業だった。今川氏が駿府の皮作を保護したのもそのためである。それが江戸時代以降、武具製造から平和産業へと移り変わって現在に引き継がれているのである。